

映画「ラスト・サムライ」で大活躍！ 俳優 尾崎英二郎さん（平3経済）

留学で英語力磨く 国際派俳優目指す



▲胸を刺され、苦悶の表情の尾崎さん演じる侍

大ヒット中の米映画「ラスト・サムライ」(エドワード・ズウィック監督、トム・クルーズ、渡辺謙主演)に、尾崎英二郎さん(平3経済)が出演、クライマックスで壮絶な戦いに挑むサムライの一人を演じている。

俳優として10年のキャリアを持つ尾崎さんは在学中、米ネブラスカ大学に長期留学した語学力を生かし、海外の映画や舞台で幅広く活躍している。

尾崎さんにとって初のハリウッド映画となった本作。8000人もの応募の中から厳しいオーディションを経て獲得した役割は、バトルコア(戦いの核)と呼ばれるスタントアクションも演じる侍。出演時間こそ短いですが、米スタッフとコミュニケーションが取れる日本人キャストのリーダー役となり、カメラの裏側でも映画に貢献した。

「殺陣、真剣斬り、弓道などトレーニングに励みニュージーランドロケに臨んだのですが、数千人による殺戮場面での撮影は凄まじいもので、五体満足で終わることがよく出来たものだと思います」

撮影を終え、尾崎さんらバトルコアメンバーは記念のTシャツを作り、お世話になった人たちに配った。

「トム・クルーズにも直接、手渡したら彼は『日本人の皆が懸命に働く姿勢に感心したよ。君たちと毎日、共に戦うことが楽しみだった。この映画を創ったことは誇りであり、生涯忘れられない一本となるだろう』と真摯に言ってくれたんです。こんなトムをはじめ完璧を目指す正真正銘のプロの集団の中で仕事が出来て、幸せでした」

同作品に出演前は、日系人をテーマにしたブラジル映画「GAIJIN2」に主要キャストの一人として出演。日本での公開が待たれる。

「専大時代の仲間が常に応援してくれるのがうれしい。今後は拠点を米国に移し、世界に通用する俳優を目指します」

【ニュース専修2月号9面】

Interview: インタビュー ゼミナールの中で討論の方法を学びました



大学院文学研究科特別聴講生 ヴォ・ヴ・ミンさん ハノイ国立大学
ハノイ校人文社会科学大学大学院修士課程2年

ベトナム国立大学ハノイ校人文社会科学大学大学院から、専大での初の大学院留学生(文学研究科の特別聴講生)として一昨年10月に来日。今年3月、約1年半の研究成果を携えハノイに戻り、修士論文を仕上げるつもりです。

ドイモイと明治維新

東洋学日本学科で日本の近代史を研究していますが、特に明治時代に興味を持ちました。ベトナム戦争(75年終結)を経て南北統一を果たしたベトナムは、社会主義体制を堅持しながら改革開放路線を採用。経済停滞の打開策としてドイモイ(刷新)政策を86年から打ち出し、中央集権的計画経済から市場経済への転換を推し進めています。その状況と、かつて日本が鎖国から近代国家を目指し、西洋文明を受け入れ諸変革を進めてきた明治維新時との間に、共通点が見出せないかと考えたからです。

ことに興味を持ったのは政府高官として新政府税制の柱となった地租改正を推進した神田孝(たか)平(ひら)についてです。引き続き研究を進めますが今、精力的に資料を集めているところです。

資料といえば、日本で最も感じたことは、資料の充実ぶりです。図書館の蔵書の多さには感嘆し、インターネットなど環境設備の素晴らしさにも目を見張りました。さらには研究の進め方におけるベトナムの大学との違いも感じました。特にゼミナールの中で、討論の方法を学びました。先生と学生が双方向で意見を出し合うゼミのあり方は、ぜひ見習いたいです。

ゼミで初めて発表した時、ゼミ生から質問を浴びせられたことは、今では懐かしい思い出。教授法や資料分析の方法も参考になりました。

指導の新井勝紘先生は、学問に関しては厳しい方ですが、温かい方で、ゼミ生もみな親切です。日本での初めての一人暮らしは、人生における貴重な体験となりましたが、ゼミの皆さんは、孤独な留学生を支えてくれた「家族」のような存在でした。

【ニュース専修2月号9面】

英語の学習10人10話 第9話 英語が苦手な人こそ留学を 小西恵美(経済学部講師)

私は今では大学で英語を教えています、実は、中学1年で初めて英語に触れて以来、大学院に入るまで、「嫌いな科目は英語」、「不得意な科目も英語」と言い切って、さんざん英語の先生を困らせたものです。そんな私の転換期は留学でした。今回は英語圏への留学について少しお話ししてみましょう。



生活習慣から考え方に至るまで、日本とは大分異なる外国での生活は、見るもの、聞くもの、何でも新鮮で刺激的です。単に生活するだけでは飽き足らず、より深く知りたいという好奇心がわきあがり、たくさんの現地の人々とコミュニケーションをとりたくなります。それに加え、世界中から来ている留学生との交流は、日本ではなかなか経験できないものです。

文法もお国なまりの発音もお構いなしにしゃべる人々の中で、英語が大の苦手だった私ですら、いつしかJapanese Englishを堂々としゃべるようになり、と同時に、英語への苦手意識や敵対心もいつのまにかなくなっていました。こうなるとしめたもの。「苦手の悪循環」を断ち切れた時、初めて無理のない英語力向上が期待出来るのです。

英語が不得意な人は留学に行けない、と思っている人。英語には興味がないし、英語の学習はもうあきらめたから留学なんて考えない、という人。そういった人こそ、留学してみましょう。視野が広がる上に、語学への興味以外から入ったとしても、結局は英語力もついてきます。

本学の国際交流センターには様々な留学プログラムがあります。英語が苦手な人も、もちろん、英語が大好きな人もどんどん留学して、英語力をブラッシュ・アップさせましょう。留学先の文化に触れるだけでなく、日本の文化を伝えることも忘れずに。

【ニュース専修2月号9面】